

地上の星(49)

ゴスペルホール「聖書を読む会」

特別企画(56)

身を挺して暴走する列車を 止めた鉄道員 長野政雄物語



1909年(明治42年)2月28日の夜、北海道上川郡の塩狩峠をあえぎながら登る列車があった。いつもの見慣れた風景である。ところが、この夜、あろうことか列車の最後尾の連結が外れ、客車が逆行し始めた。このままでは暴走し大事故になることは確実である。乗客はだれもが転覆を恐れ、車内は騒然となった。この日、たまたま乗客の一人として鉄道旭川運輸事務所庶務主任、長野政雄が乗り合わせていた。

長野は客車のデッキにハンドブレーキがあるのを素早く見つけ、それでブレーキをかけたものの、ブレーキの力が足りず、列車は完全に止まらなかった。

彼は一瞬、乗客の方を振り向き、別れを告げるよううなずいた(目撃者談)。その次の瞬間、「ゴトン」という鈍い音とともに列車が完全に停止した。長野が列車の下に身を投げ出し、自らが下敷きとなって列車を止め、乗客の命を救ったのである。

死後、その懐中から、長野が常に携行していた遺書が発見された。

「苦楽生死均(ひと)しく感謝。余は感謝してすべてを神に捧ぐ」。まだ三十才であった。

今回は、三浦綾子の名作『塩狩峠』および、現存するわずかな手がかりをもとに長野政雄氏の生き方を学びます。



記

1. 日時：2016年3月11日(金) 10:30 AMより
2. 場所：ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師：尾崎富雄(ゴスペルホール代表)

入場無料。どなたでも参加できます。